

## ○基調報告 ショスタコーヴィチ『森の歌』の謎

亀山郁夫

独ソ戦、スターリン、作曲の背景

今日は二十世紀のロシア、いや今や世界を代表するといってもよい作曲家ドミートリー・ショスタコーヴィチ中期のオラトリオ、『森の歌』についてお話しします。

さて、今日のお話の中心テーマとなるショスタコーヴィチの『森の歌』。何よりもこの音楽の背景にあるのは、第二次世界大戦、とくにそのなかの独ソ戦です。あの大战の真の勝利者は誰だったかを問うとき、いろいろな考え方が生まれてくると思います。エマニュエル・トッドというフランスの思想家は、『帝国以後』という本の中で、「真の勝利者はロシアであった」と書いています。その意味をきちんと考えないと、戦後のイデオロギー的な混乱を理解できないと言っているわけです。

しかしトッドの言う「真の勝利者」ですら、独ソ戦でじつに二七〇〇万人という膨大な犠牲者を生まれました。勝利者、戦勝国と呼ぶにはあまりにも無残な数字です。

独ソ戦ではいくつも激戦地が生まれましたが、わけてもスターリングラード攻防戦は、規模において群を抜いています。現在はヴォルゴグラードと呼ばれるその街で行われた攻防戦、これは歴史上屈指の、凄絶な戦いと言われています。ジャン・ジャック・アノー監督が二〇〇一年に製作した映画でも有名になりましたね。

ソ連軍と戦ったのは、ナチス・ドイツを中心とした枢軸国でした。枢軸国には、ドイツのほかハンガリー、クロアチアなどが加わりました。攻防戦以前、スターリングラードの人口は六

十万人でしたが、戦後は九八〇〇人まで減少してしまっただけで、それほどささいな戦いだっただけですね。

では、この『森の歌』という音楽が書かれる背景を、歴史年表を使って振り返ってみたいと思います。スターリンについて詳しくは述べませんが、ただ「黙示録の年」と呼ばれる一九三七年という年号だけは記憶に留めておいてください。スターリンの「大粛清」が猖獗を究めた年であり、この一年だけで数十万人のホワイトカラーが銃殺された。スターリンは全員の銃殺の指令書に青鉛筆でサインしたと言われています。ソヴィエトの歴史のなかでも最悪とされるこの年に、ショスタコーヴィチ最大の傑作とされる「交響曲第五番」が書かれる。

悲劇の始まりは、一九三九年の独ソ不可侵条約、別名モロトフ・リッベントロップ条約の締結です。第二次大戦の傷を大きく深めるにいたった原因の一つです。その犠牲となってポーランド人将校が四、五万、ソ連側に拉致されて銃殺される事件も起こった。有名な「カティンの森」ですが、全貌が明らかにされるのは、それから約半世紀後のペレストロイカ時代に入ってからのことです。

しかし独ソ不可侵条約は、ヒトラーによって一方的に破棄され、四一年に独ソ戦が勃発。四一年にはレニングラード（いまのペテルブルグ）包囲戦が始まります。これが三年近く続き、包囲戦によってロシアで一〇〇万人ぐらゐの餓死者が出ました。

一九四五年、独ソ戦が終結。しかし、ソヴィエトの人たちが戦勝の喜びに浸れたのはきわめて短い期間でした。ショスタコーヴィチは、終戦と同時に交響曲の執筆を企てました。ちょうど交響曲第九番にあたります。当然、権力側はあの偉大なベートーヴェンの第九「合唱付き」にならって壮大な戦勝の音

楽を書いてくれるだろうと期待しました。ところが、彼らは完全な肩透かしを食らった。書かれた交響曲は、合唱付きの大交響曲どころか、わずかに二四、五分の、非常にコミカルな内容を持った作品でした。スターリン権力はそれを知って、われわれを嘲っているのかと激怒するわけです。

先ほど述べたとおり、独ソ戦における戦勝は、真の解放をもたらしませんでした。戦勝によって綱紀に緩みが出ることを恐れたスターリンが、新たな締め付け政策に乗り出したことが原因です。

しかし、何を恐れてスターリンは戦勝の喜びを潰しにかかろうとしたのか。答えは歴史から見えてきます。ソ連軍はドイツの首都ベルリンまでドイツ軍を追っていき、その結果の勝利となったわけですが、若い兵士たちは戦後、武器を持たずに西側で作られた外套を着て帰ってきた。彼らは西側の先進の世界をベルリンその他の町でつぶさに見聞し、結果として将来的に現在のソヴェト体制への批判を強めるのではないか、そういった恐怖がスターリンにとりついた可能性があるのです。

受難は、まず作家や芸術家たちに降りかかりました。歴史的に「ジダーノフ批判」と呼ばれる「反形式主義キャンペーン」です。

アンドレイ・ジダーノフという人物は、当時のソ連共産党中央委員書記で、スターリンのもと、文化政策を一手に仕切っていました。彼が中心となって、さまざまな先進的芸術への批判が展開される。理屈としては「形式主義を批判する」のですが、これは今日私たちが考える形式主義とは理解が異なります。型にはまっていると、形だけとかいうのとは反対に、芸術上の諸形式における実験を突きつめて行うこと、それを「形式主義」と呼んで批判したのです。

批判の対象は、美術、音楽、文学など、芸術作品のあらゆるジャンルに及びました。検閲のポイントをあげれば、対象となる作品が社会主義リアリズムの精神に反していないか、労働者、農民大衆から遊離した難解なものになっていないか、ということとです。現実的には、スターリンへの批判を封じ込めるための文化政策といつていいでしょう。音楽ではプロコフィエフ、ハチャトゥリアン、カバレフスキーなども槍玉にあげられました。しかし真の狙いは、誰よりも若くして世界的栄光を勝ち取ったショスタコーヴィチを封じ込め、コントロールすることだったと考えられます。

本来的にショスタコーヴィチは、ソヴェト権力に対してきわめてアンビギュアス（曖昧）な態度をとってきました。最初の批判は、一九三二年作曲の彼のオペラ『ムツェンスクのマクベス夫人』に対して行われました。三六年になって、すでに大評判を呼んでいたこのオペラを見に来ていたスターリンが、演奏の途中で退席、翌日の党の機関紙に「音楽ならざる荒唐無稽」という批判記事が掲載されます。これが、オペラに対するスターリンの公式見解とされたのです。

また、同じ時期に作られた交響曲第四番も、リハーサル段階で関係者に危険視され、リハーサルも遅々として進まず、ついには作曲家自身が初演を取り下げるという事態にいたりしました。しかし、ショスタコーヴィチが権力にアンビギュアスな態度をとったのに対し、スターリン権力も彼に「鉛と鞭」の双方を駆使しました。厳しい批判にさらされる一方で、スターリン賞を授与されたり、都心に広大なアパートを提供されたりと、まさに毀誉褒貶、時代の波に翻弄されるのです。

次に、大きな転換点となったのが、終戦の年一九四五年に書かれる「交響曲第九番」です。古典的な四楽章形式をもつ交響

曲で、同年十一月にムラヴィンスキーの指揮で初演されるのですが、これが「同時代の理念や感情からほど遠い、皮肉っぽい懷疑主義と様式主義から抜け出していない」といった批判を受けるわけですね。

その批判に、シヨスタコーヴィチはどう対応したか。一九三七年の経験がみごとに生かされました。結論を言うと、すぐさまスターリン権力に対する恭順を表すことにしたのです。こうして改めて、少なくとも表向きはスターリン主義への迎合の音楽が書かれることになるわけですが、じつはそれが、本日のテーマとなるオラトリオ『森の歌』というわけですね。

よく知られたエピソードを紹介しましょう。『森の歌』が書かれる直前、反形式主義キャンペーンで精神的に追いつめられていたシヨスタコーヴィチにスターリンから電話がかかってきます。スターリンはじきじきに彼に慰めの言葉をかけました。かいつまんで言えば、非常にやさしい口調で「あまり腐らないようにがんばってください」と声をかけたわけですね。

シヨスタコーヴィチは、スターリンからの電話をひどく緊張した気持ちで受けたと伝えられます。しかし、内面的には深く引き裂かれていたはずですね。スターリンの声を聞けば、その要請に無条件で従わざるをえなくなる。しかし電話が終わればふたたび本音が戻ってくる。おそらくシヨスタコーヴィチは、言葉の表面に現れた恭順の思いとは裏腹に、スターリンを礼讃する気持ちと猛烈な反発心との、両方に引き裂かれていたにちがいないのです。事実シヨスタコーヴィチは、この電話のあとトイレに駆け込み、便器に顔を突っ込んでスターリンの悪口を吐き出したという逸話も残されているくらいです。

## 自然改造計画と『森の歌』

ジダーノフ批判たけなわの時期に書かれた『森の歌』ですが、これにはオラトリオという名前が与えられています。一種の標題音楽でもあり、ソヴィエト連邦の自然改造計画の一貫として行われた植林事業を称える音楽です。ところでこの「自然改造計画」とは何か。ご存じのようにロシアの国土は、非常に厳しい自然に囲まれています。その自然との戦いのなかで、ロシアという国、ロシア人あるいはソヴィエト人は、独自の文明とアイデンティティを獲得していった経緯があります。とりわけ第二次大戦で、森林もステップ（穀倉）地帯の防風林も、全部やられてしまった。これをなんとか立て直そうとして、自然の改造計画を行うことになったのです。

では『森の歌』の楽曲構成について説明します。

第一曲「勝利」では、たおやかで勇壮なメロディで紡がれる序奏の後、独ソ戦での勝利がひとえにスターリンの活躍によるものであったと歌われます。文字通り、スターリン礼賛による開始です。

第二曲「祖国に森の衣を着せてやろう」では、スターリングラード攻防戦で荒廃した国土に森林地帯を作るべきだとの提言が行われます。ここでもスターリンとの関わりが言及されることになります。

第三曲「過去の思い出」は、一転して暗い陰影をはらんでいます。早魃や砂嵐に苦しむ農業を救うため、ぜひとも植林が必要との主張が謳われます。

第四曲「植林するピオネールたち」。ほんとうに愛らしい、すばらしいユーフォリア（幸福）感覚にあふれた音楽で、作曲家のある面で楽天的な個性が出た旋律性の高い曲です。第三曲とほとんど切れ目なしに演奏され、少年合唱によって植林事業

に加わるピオネール少年たちの活躍が描かれます。

第五曲「スターリングラード市民は前進する」も第四曲と切れ目なしに演奏されます（後に「コムソモールは前進する」と改題）。再びスターリン・モチーフへと回帰、スターリングラード市民の困難な闘いが歌われる。戦争の傷跡はまだまだ生々しく、当時としてはまさに励ましの音楽になるわけですね。

第六曲「来るべき散策」は、第一曲を基本モチーフとした、恬淡たる叙情性とユーフォリア感覚に満ちた曲です。ここでは、植林事業を終えた森林地帯の、ユートピア的ヴィジョンが描かれています。

そして終曲、第七曲「賛歌」。オラトリオ全体を締めくくる二部構成の壮麗な音楽で、四声によるフーガ形式の後に、植林事業の推進者であるスターリンへの賛歌をもって曲全体が締めくくられます。

ちなみに、一九五六年のスターリン批判後、「スターリン」という言葉を別の歌詞に置き換える作業は、第一、第五、第七の各曲でおこなわれました。

大きな問題は、この作品がなぜ「オラトリオ」なのか、という事です。

オラトリオとは、基本的には宗教音楽の形式のひとつであり、ローマ・カトリックに起源をもちます。それがドイツに移ってバッハの『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデルの『メサイア』、ハイドンの『天地創造』といった作品に受け継がれていく。

オラトリオで取り上げられるテーマは、聖書のなかの逸話がおもな題材となり、合唱、独唱、器楽伴奏などを伴います。いふなれば、演技や舞台装置などのないオペラのようなもの、と考えられる。オラトリオのなかでもとくにキリストの受難を扱うものについては、一般的に「受難曲」の名前で呼ばれます。

バッハの『マタイ受難曲』が有名ですね。

しかし社会主義のソ連において、このオラトリオのジャンルには、非宗教的な内容が盛り込まれざるをえませんでした。つまりオラトリオに、当然スターリンへの賛美という要素が入ってくる。間違いなく、イエス・キリストとスターリンが二重写しされていた、ということですね。

ソ連ではこのオラトリオのジャンルは、一九三〇年代から四〇年代にかけて、スターリンを称える音楽として何曲か書かれました。プロコフィエフの『平和の祈り』という作品もそうです。以前はやや小規模な「カンタータ」というジャンルによって、スターリン礼讃が行われてきました。ロシアのある音楽研究者は、『森の歌』は、物語性に欠けているので、「カンタータ」と呼ぶのがふさわしいと述べています。

いずれにせよ、この音楽が、スターリン礼賛の精神に満ちあふれていることはいうまでもありません。しかし現代では逆に、こうした事情が、これらの楽曲の上演機会を減らすことになっています。

音楽に秘められた真の意図とは？

つぎに『森の歌』の成立背景を、別の視点からふり返りましょう。十九世紀後半、ロシアで帝国主義が始まって以来、森林伐採が大規模に行われる。チェーホフの名作『ワーニャおじさん』には、森の喪失の場面が出てきます。一八八八年の時点で、ロシア国土の森林率は五六%から三六%に落ち、さらに一九一四年には三〇%にまで減りました。

スターリン自身は、そもそも第一次五カ年計画で、ドイツの超・工業国家を越える工業国家をつくることを目指しました。一九二〇年代の後半から自然を敵対視し、大規模な農業改革、

集団農場などをつくっていく。森林伐採はそのために行われたわけです。

しかし三〇年代以降になると、ソ連は大規模な飢餓、旱魃に襲われるようになります。その危機感から第二次世界大戦後の一時期、スターリンは森の再生という思想に駆られ、それが「自然改造計画」の一環となつてあらわれます。

森林復活のプロジェクトは、「森林が身体と精神の治癒に役立つ」という思想にもとづき、大富豪モロゾフの支援によって行われました。その流れに即して作られたのが、シヨスタコーヴィチの『森の歌』です。自然改造計画をテーマとした音楽、じつさいにシベリアの川を逆流させようとするプランとか、ソ連南部の防風林計画という大規模なプランが、『森の歌』の思想のひとつの中心となります。

ただ、中央アジアの草原地帯の灌漑計画が実施された結果、四、五十年を経て世界有数の湖・アラル海の消滅という事態を招き、生態系の激変による悲惨な状況が出現します。周辺地域に住む人々の幼児死亡率が、劇的に高まっているそうです。

しかしこの音楽を、いかに社会主義リアリズムやスターリン擁護の音楽とみなすにしても、そこには、純粹に音楽的観点から見て(歌詞のレベルをいったん無視し)、まぎれもないシヨスタコーヴィチの固有名が刻みこまれているように思われます。

つまり楽曲のいたるところに、作曲家の刻印ともいふべき、微妙に複雑なディテールがはめ込まれているのです。アコピヤーンという研究者が指摘しているのは、主として次の四点です。

1、第三曲において、交響曲第五番と第八番から「引用」がなされる(これは「引用」というよりも、むしろ「書き癖」に近いものかもしれませんが)。

2、第四曲の冒頭部、とつぜんの音調の変化(嘆きのモチー

フ)、これは後の交響曲第一四番の「死者の歌」を予告している(これはクシストフ・マイヤーの発見によるものです)。

3、第六曲の冒頭のイングリッシェホルンが、『ムツェンスク郡のマクベス夫人』の最終幕の同じようなソロを髣髴させ、また交響曲第八番第一楽章およびD S C H (ドミートリー・シヨスタコーヴィチの名前。対談参照)モチーフの暗示がみられること。

4、第七曲冒頭、珍しい四分の七拍子の選定。このなかでもっとも不適切なこの拍子が、次の詩の部分に与えられている。「コルホーズの野に／ほうほうの区画に／たおやかな白樺が／祖国の兵士たちが」

さらにこの「森の歌」には、作曲家・吉松隆さんの見事な謎解きがあります。彼が注目するのは、シヨスタコーヴィチが「改作」を施したムソルグスキー『ボリス・ゴドゥノフ』との関係。とくに最終場「クロームイの森」での最後の合唱と『森の歌』の間に、テーマ上の隠された謎がある、と。つまり『ボリス』での偽の皇子の賛歌「神によって救われた皇子に栄光あれ!」と『森の歌』におけるスターリン賛美「聰明なるスターリンに栄光あれ!」との連関。『ボリス』ではしかも、この大合唱の後で「聖痴愚」(白痴)が登場し、舞台上に一人残つて「泣け、ロシアよ! 闇が始まるぞ、白も黒も区別がつかず、もの見えぬ暗闇が!」と歌い出すのです。吉松さんの言葉を引用しておきます(註)。「『森の歌』のフィナーレは(シヨスタコーヴィチ自身がこの「白痴」に我が身を置き換え)、ボリスの二重構造……民衆は皇帝を称えながら同時に疑惑の念を抱き、救世主のデIMITリもまた実はニセモノである……を告白しているのではないか? ……と、聞けば聞くほどそう思えてくるのである。そしてそう思い至ると、シヨスタコーヴィチがこの作品

で単に（スターリン政権の自然政策を賛美し）、そして同時に（尊敬すべきムソルグスキーのオペラをモデルにし）作曲した、というだけではない奇妙な裏の意図（と言うより皮肉）を感じざるをえなくなる」

……吉松さんはこの文章の最後を、いささか過激に「『森の歌』とは実は『クロームイの森の歌』なのである」と締めくくります。シヨスタコーヴィチ自身が『森の歌』をめぐって書いた「尊敬するムソルグスキーのオペラをモデルにした」との謎めいた一行の真意も、これで明らかになるかもしれません。では作曲家は真意を明らかにしていたのか。友人グリークマン宛ての手紙が大きな参考になります。

「もしも、スターリンの名前の代わりに、たとえば、オランダ女王の名前だったとしたら非常にすばらしいだろう。彼女は、緑化計画のたいへんな支持者だと聞いている」「ほんとうにそうならどんなにすてきだろう！ 音楽に対してはよくは責任をとるが、歌詞に対しては……」

スターリン権力への迎合という忸怩たる思いにとらわれながらも、シヨスタコーヴィチはおそらく、こういう音楽でも書ける自分の才能を、心ひそかに愛でていたといえるかもしれないね。

私の報告の最後に、結論めいた推論を申し上げます。『森の歌』は、ことによるとベートーヴェンの交響曲「第九」、いわゆる〈歓喜の歌〉を意識しているのではないかと思えます。シラーの〈人間〉賛歌ではなく、〈自然〉を称えることによつて、「第九」に代わる音楽をつくらうとしたのではないかと。

『森の歌』をこれから実際にお聴きになる皆さんは、その終結部の合唱、独唱を聴いたら、ほんとうに「第九」の高揚感を経験されると思います。

さて、一九五三年三月五日。プロコフィエフの亡くなった日でもありますけれども、スターリンが死んだ日です。同時に、いまの「自然改造計画」も終息することになる。このあと、シヨスタコーヴィチは交響曲第一〇番を作曲する。私はこれが正真正銘の彼の第九番「合唱」だと考えているのですが、ただし合唱はついていない。ということに合わせて推測すると、『森の歌』と次に書かれる交響曲一〇番との二曲で、ワンセットの〈歓喜の歌〉が書かれたという仮説が成り立つわけです。くどいようですが、この交響曲の第一〇番は、とにかくにも意味深な音楽ですし、その政治的な、あるいはパーソナルな背景を知らなければ知るほど面白さが増していきます。どうか、みなさんの宿題としていただけましたら幸いです。

注 「シヨスタコーヴィチ「森の歌」を深読みする」〔月刊クラシック探偵事務所、二〇〇六年九月一〇日号〕

[http://yoshim.cocolog-nifty.com/office/2006/09/post\\_360.html](http://yoshim.cocolog-nifty.com/office/2006/09/post_360.html)